



## 目次

1. 秋学期公開授業の実施状況報告  
各公開授業の紹介
2. FD ミニシンポジウム「学生ポートフォリオの導入に向けて」
3. 各部局の取り組み  
国際社会科学部研究科／経済学部／理工学部／環境情報学府
4. 第3回しゃべり場報告「抽選制度の改善策」
5. TA 研修会のお知らせ

## 秋学期公開授業の実施状況報告

FD推進部兼務教員 物部博文

秋期は、10月から1月にかけて、下記に示す9名による公開授業が実施された。いずれの授業も教員の創意工夫が認められるとともに、学生が主体的に授業に参加する場面が設けられていた。これらの授業に参観すると、自らの授業実践に参考になる視点をいくつも提供される。惜しむらくは、授業参観者数が決して多くはないことであり、今後はより多くの教員が参観できるように改善したい。

10月26日（金）3限「現代社会福祉演習」  
相馬直子准教授

11月13日（火）4限「分子生物学」  
栗原靖之教授

11月14日（水）4限「スタジオⅠⅢ」  
川添裕教授

11月26日（月）3限「情報と社会」  
室井 尚教授

11月27日（火）1限「プログラミング入門」  
濱上 知樹教授

11月28日（水）4限「国際人事管理論Ⅱ」  
柴田 裕通教授

12月14日（金）3限「英語アドバンス  
ト」 マッコレー アレクサンダー教授

1月16日(水)3限 「物理工学実験情報演習C」 梅原出教授

1月28日(月)3限「課題プロジェクト演習都市と法」 松橋 圭子プロジェクト科目総括マネージャー

各授業の内容については下記の通りである。

◆10月26日(金)3限「現代社会福祉演習」  
相馬 直子准教授

ゼミ形式の授業である。公開された日は学生のプレゼンテーションが行われた。数人のグループにテーマが割り与えられ、グループワークでまとめあげる。3組の発表を聞いた。司会も学生である。教員の役割は議論を促すことである。この授業を通して、学生に何ができるようにしたいかという質問に対して3点を挙げられた。

1. しっかりと聞くことができる
2. よいコメントを言える
3. 関心のあることを伝える

基本的なことであるが、難しい課題にも全員ができることを望んでいる。

この演習は同志社大学との研究交流を行っている。学生にとって、他大学の学生の意見は強い刺激になる。このような交流を活発にできる支援があればいいと思った。

◆11月13日(火)4限「分子生物学」

栗原 靖之教授

真核生物の複雑性・多様性を生みだした遺伝情報発現メカニズムのうち、転写後調節機構について理解を深める授業である。

理工学部化学生命バイオコースの2年生を対象とした授業でパワーポイントを主に実施していた。授業にグループディスカッションを取り入れ、学生が発表する場面を取り入れるなどの、

双方向でのやりとりと学生の主体的な授業参加を大事にした授業であった。授業資料を観るだけではなく、考察し理解させ、学生が今後の研究発表等をする上での基礎的な手法等も学ばせる講義内容であった。

◆11月14日(水)4限 「スタジオI III」  
川添 裕教授

横浜市と連携した「もっと横浜」プロジェクトの活動であり、「国際都市・横浜発見スタジオ」の授業活動である。横浜市副市長・鈴木伸哉氏講演会でタイトルは、「みなとみらい21地区と横浜駅西口周辺地区の街づくり」である。

当日は、学生を司会として副市長の講演会の様子が公開され、多くの参加者がメディアホールに集まった。

◆11月26日(月)3限 「情報と社会」

室井 尚教授

情報の発達をもたらした社会変化をさまざまな視点で解説する。対象とする社会や説明に使われる例が身近であるために、受け入れやすい講義内容である。

受講生が150名以上いる全学向けの教養教育科目である。どんな学生が聞きに来ているか、どんなテーマに興味を持っているかは毎年変わる。学生からの情報を集めながら、フレキシブルに講義の対象を変えていく。学生主体の講義内容を作り上げていながら、自分の考えを伝えることを実現している。

リラックスした話し方も受け入れやすい雰囲気を作り上げている。全てにわたって自由な講義スタイルである。

◆11月27日(火)1限 「プログラミング入門」 濱上 知樹教授

プログラミング初学者向けに、C言語の基礎

から基本的な制御構造までを学ぶ授業である。

当日の授業では、まず、今年1年間の総データは、過去5000年の合計よりも多いことやAKBの総選挙の話など、学生の身近な話題からはじまった。

今回の授業では、C言語の理解に重要なポイントの概念と使い方について学ぶ授業であり、わかりやすい授業であった。

◆11月28日(水)4限「国際人事管理論Ⅱ」

柴田 裕通教授

教員の学生への思いやりを感じる授業であった。学生が考えながら授業を聞いてくれるためには、どのように授業を進めていけばよいか。授業のところどころにその答(気配り)が見られた。

学生が授業中に頭を働かせるためには答を考える質問を投げかければよい。説明用スライドをコピーした配布資料には空欄があり、学生が手を動かさなければ完成しない。教壇から降りて、学生の席の間で質問をすることで、一体感が湧いてくる。学生とのコミュニケーションを大切にしている授業であった。

◆12月14日(金)3限「英語アドバンスト」

マッコレー アレクサンダー教授

学生の活動を主体とした授業であった。

まず、学生は授業前の課題として、オンラインの原稿を学習する。また、事前課題として、そのトピックに関連したアンケートを作成して授業にのぞむ。授業では難しい語句の内容確認をする。次に作成したアンケートをお互いにし

て、その反応を受講者全体にフィードバックする。最後に3人組(面接案、受験者、採点者)に分かれてテストを実施する。

以上の流れの中で学生が英語を主体的に学べるように授業がデザインされており、アクティブラーニングとして参考になる授業であった。

◆1月16日(水)3限「物理工学実験情報演習C」 梅原 出教授

超伝導を扱った演習授業であった。まず、超伝導についての学生の知識や生活と超伝導のかかわりを確認していた。次に液体窒素をもちいた実験を実施した。教員がモデルを示し、1班ごとに実験を実施していった。学生と教員の距離が近く、学生の活動を主体とした授業であった。

◆1月28日(月)3限「課題プロジェクト演習都市と法」 松橋 圭子 プロジェクト科目総括マネージャー

本授業は、今日的な諸問題とそれらを支えるさまざまな法と仕組みの関係を考察し、新しい時代の動向を理解したうえで今後の都市やまちづくりのあり方について自ら学び考えていくことを目的とした授業である。

当日のテーマは「道州制」であり、まず、提案者からのプレゼンテーションが実施された。続いて、グループミーティング、立論、質疑応答のプロセスを学生主体で進めていった。

学生が問題提起し、話し合いながら思考を深めていくプロセスは、アクティブラーニングのモデルとして参考になる。

## FD ミニシンポジウム「学生ポートフォリオの導入に向けて」

FD 推進部門長 上野誠也

## 各部局での開催

平成 25 年度から学生個人が自分の成果等を記録することができる学生ポートフォリオが導入される。学生ポートフォリオには、各学期の始まりに目標を記載し、学期が終了したらその振り返りを記述する部分がある。記載を確認する担当の教員は、担当学生の学生ポートフォリオを閲覧し、チェックする。学生がどのようなポートフォリオを作成し、担当教員がどのようなチェックを行っているかを説明するために、平成 25 年度の FD ミニシンポジウムは、各部局の教授会の前に時間をいただいて、導入される学生ポートフォリオの説明を行った。

平成 24 年 12 月 10 日の経営学部を最初の開催とし、経済学部、留学生センター、教育人間科学部とまわり、平成 25 年 1 月 21 日の理工学部で合計 5 回開催した。どの部局も多くの先生方の出席をいただいた。FD ミニシンポジウムの開催では、学務情報係の協力を得て、学生ポートフォリオのデモは無線 LAN 経由で実際に導入されるシステムを駆動して、生の紹介をすることができた。

## 「学習」から「学修」へ

大学に求められている教育が変化を示した。文部科学省中央教育審議会が「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて -生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ-」というタイトルの答申を発表した。大学教育は質的に転換をしなければならないという強い要求が寄せられている。本学でも教員に意識してもらうために、3 名の外部講師をお招きして、平成 24 年 11 月 2 日(金) に FD シンポジウムを開催した。

この答申の中では、今まで「学習」という文字

を使っていた単語がすべて「学修」という文字に改められた。この答申が初めて使った文字ではないが、この文字を使うことによって、学生が主体的に学び続ける力を身につけるように教育の質的転換を要求していることが強調された。すなわち、学生が受け身で講義を受けるのではなく、自ら学ぶことが大学教育で重要であることを示している。それを実現するためには、大学は教育内容、カリキュラム、学習支援を見直さなければならない。これを受けて、学習支援の観点から、本学では学生ポートフォリオを平成 25 年度から学部生を対象に導入することになった。

主体的な学びはどのように実現するか。それには以下の 4 項目が必要と考えられる。まず、学修の前に 2 点を実行する。

- 1) 学修目標の設定：自分が何を身に着けたいかを考える。
- 2) 学修計画の設定：目標達成のための履修計画を立てる。

次に、学修の後に次の 2 点を実行する。

- 3) 学修の記録：目標達成までに行った内容を示し、自分の成長を記録する。
- 4) 学修の振り返り：自分が得たこと、身につけたことを考え、今後の学修へ結びつける。

当然のことながら、このサイクルを繰り返すことで学生は成長していくのである。これら 4 点を記録として残すことに意義がある。また、これらの記録を他人に見せることで、自分の実績を示すことができるのがポートフォリオの強みである。

## 学生ポートフォリオの周知

学生ポートフォリオとは、学生が学修過程ならびに各種の学修成果を長期にわたって収集した

ものである。そこには、学修目標、学修計画表、レポートやその作成のために収集した資料、成績単位取得表、振り返りシートなど幅広い情報が含まれる。

学生ポートフォリオには大学の講義に関する成果物を保管することができるが、その他にも課外活動の実績も保管できる。したがって、学修による成長以外にもキャリア形成の記録としても重要な情報を持つ。例えば、就職活動の時に、学生ポートフォリオの出力を就職担当者に見せることで自分を売り込むことができる。

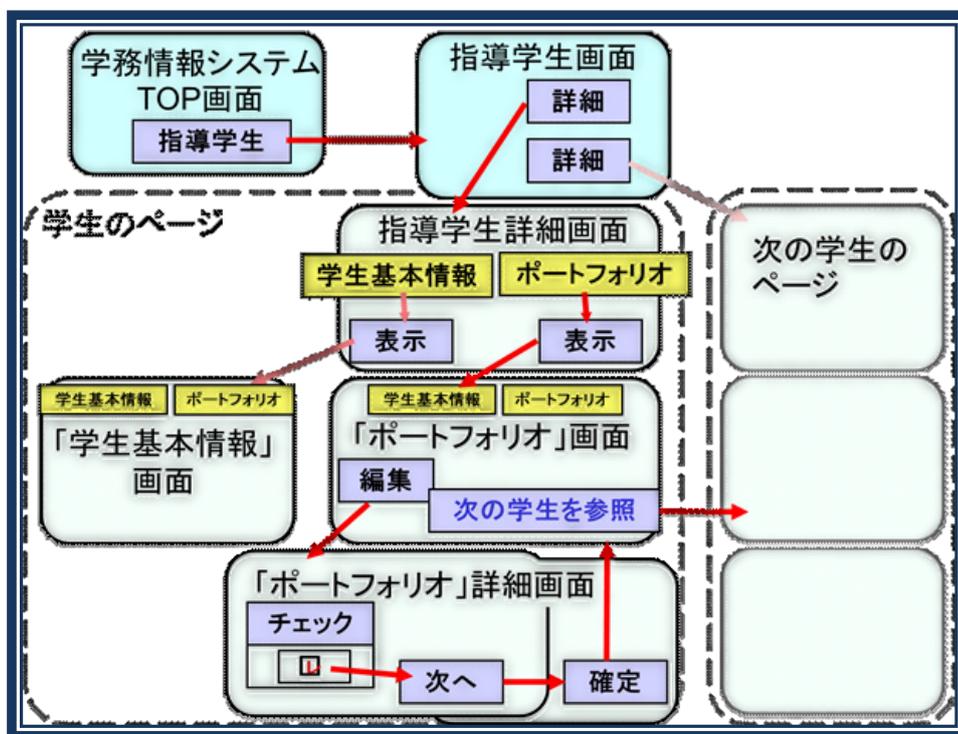
今回の導入にあたって、キャリア支援部とFD推進部が協力して、全学に学生ポートフォリオの説明を行っている。学生にはキャリア支援部が、教員にはFD推進部が説明を行っている。導入したシステムが有効に活用されるまでには時間がかかるが、両者の協力で進めている。

### 学生と教員の協働作業

学生ポートフォリオは学生のための支援システムである。学生が学修の計画や学修の振り返りを記述することで、目標に対する成果を蓄積し、身についたスキルを目に見える形にする。自分がどう変わったかを記録として残し、将来の目標を示すものである。

学生一人で記述するとなると、記述を怠る可能性がある。そこで、教員がサポートする目的で、記述後に記述内容をチェックする機能を持たせた。本来のポートフォリオならば、単にチェックするだけでなく、学生の振り返りに対してアドバイスなどを記述するのであるが、今回の導入に当たっては教員の負担も考慮して、チェックのみをデフォルトとした。

下図は学生ポートフォリオの画面構成図である。最下段の画面において教員がチェックするボックスが設けられている。小さなチェックであるが、学生にとって大きなチェックになることを期待している。



学生ポートフォリオの画面構成

## 国際社会科学研究科のFD活動

国際社会科学研究科 内海朋子

国際社会科学研究科では、高度な大学院教育を実践する観点から、全学的な試みとは異なる形でFD活動を実施している。以下では今年度行われたFD活動の主な点について挙げてみたい。

まず、授業評価アンケートであるが、春学期、秋学期を通じて、記述式の間接アンケート、マークシート式の学期末アンケートを実施した。その内容はすべて集約し、全教員間で情報を共有している。中間アンケートについては、学生の行った記述に対して、担当者が受講生への返信を行い、学生に対して公開している。アンケート項目は以下の通りである。1 授業の進め方。授業の組み立て方、進行のペース、双方向授業になっているか、2 授業内容。授業の興味深さ、内容の分量、理解しやすさ。3 教科書等の教材。授業で使用する教科書や手作り教材。4 担当教員。担当教員の熱意、説明の仕方、学生の質問に対する対応。5 その他。その他、授業に対する自由な意見や勉強をする上で困っている点など。

また、国際社会科学研究科では、学内に投書箱「つながる君」を設置し、学生が常に要望を出せるようにしている。平成24年度はカリキュラムの改善の要望や、自習室の環境改善、授業の方法などについて要望が出された。これらについては、FD委員会から当該要望をそれぞれ関係する委員会に送付し、関係委員会が対応した。例えば大学院生用の共用スペースの清掃については、学生の要望に沿った改善を行う方向で対応することとなった。

法科大学院に特化したFD活動としては、アカデミック・アドバイsteamの活動がある。アカデミック・アドバイスは、3名の教員が1年生から3年生までの、10～20名の学生の担任教員となり、適宜学習のアドバイス等を行うものである。1つのアカデミック・アドバイsteamに配置される3名の教員は、民事、公法、刑事といったそれぞれ異なった分野の教員から構成されている。活動内容はチームによって自由に行われることになっており、例えば食事を一緒にとりながら、学習のことを学生に尋ねたり、面接の時間を設けて学生に様々な学習のアドバイスを行ったりしている。勿論、アカデミック・アドバイス以外にも、学生が個人的に教員に質問などを行うことは頻繁に行われている。

今後、このアカデミック・アドバイsteamの機能が強化が検討されており、面接結果の内容等、その情報を全教員で共有することが提案され、現在その準備が進んでいる。このほか、法科大学院については、FD委員や複数の教員の参加のもと、修了生との間で授業改善について意見交換が行われた。さらに、他大学の法科大学院へ聞き取り調査が計画され、1月24日に中央大学、1月31日に上智大学、2月20日に早稲田大学、2月24日に明治大学、3月1日に慶応義塾大学を、FD委員会により調査を委任された教員2、3名が訪問することとなった。調査の結果、ベストティーチャーを、修了予定の学生が投票によって選ぶなど、ユニークなFD活動が明らかとなり、FD会議において聞き取り結果が詳細に報告された。

## 経済学部のアクティブ・ラーニング

経済学部 大門正克・松橋圭子・相馬直子

### はじめに

今年度の経済学部のベストティーチャーは、マッコレー・アレクサンダー教授である。マッコレー教授の公開授業「英語アドバンスト」は、BBC 6-minute English のウェブサイトを使用し、学生は毎週、主にリスニングの宿題を自宅学習で行い、授業でもアクティブに参加しているのが特徴である。

今号では、経済学部のアクティブ・ラーニングについて紹介する。

### 「学生主体型」授業を目指して

本学経済学部の卒業生はこれまで多方面で高い評価を受けている。こうした人材を今後も継続して育成するため、経済学部では、平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラムに採択され、平成 21～23 年度にかけて「実践的教育プログラム」と「双方向型学習支援システム」を柱とした大学教育・学生支援推進事業に取り組んできた。

この取り組みには 3 つの大きな仕掛けがある。まず、経済学を学ぶ上で多種多様な日本語と英語のプログラムを用意し、授業支援システムを活用しながら 7 つの評価項目を設定することで必要な能力を学生が意識して伸ばせるよう基準を明確にした。2 つめの特徴としては、教員だけでなく学生も自己評価を行う「双方向型評価」を取り入れている点にある。さらに、半期の授業期間の中間地点では個人面談を実施し、学生は教員から直接アドバイスを受けることで学習の振り返りを行った上で後半の授業に臨むことができるしくみである。

具体的には、フィールドワークのほか、少人数による情報収集やプレゼンテーション、ディスカッション等を積極的に授業に取り入れることで、専門的な分野への関心を喚起し、何よりもこれらはすべて「学生の主体的な学び」へつなげることに重点が置かれている。

事業終了後の本年度は、3 年間の取り組み成果を踏まえた上で、引き続き授業支援システム及び授業形態の改善を重ね、「課題プロジェクト演習」科目として本学部の他のプログラムと有機的に結びつきながら確実に定着しつつある。

継続して行っている履修者アンケートでは、9 割以上が参加型授業である本プロジェクト科目に満足し、約 7 割が「後輩にもぜひすすめたい」と回答している。本年度も 2・3 年生を主な対象として、9 科目開講し、履修者は 100 名を超え、順調に学部内に浸透していることが数字からも捉えられている。

### アクティブ・ラーニング導入の背景

既述の通り、課題プロジェクト演習では、学生自らが学ぶ喜びを実感することで、学習意欲の向上につながることを大きなねらいとしている。その達成に向け、これまでもいくつかの仕掛けを組み合わせ、授業の展開を図ってきたが、今年度はさらに「主体的に学習する力」を引き上げる工夫のひとつとして、「アクティブ・ラーニング」を試験的に取り入れることとした。

すでに多くの大学では多かれ少なかれアクティブ・ラーニングの導入がみられるが、経済学部では、これまで取り組んできたプロジェクト活動を踏まえた上で、授業支援システムを使いながら、

今年度、実践的テーマプロジェクト科目の「都市と法」において先行的な実践を試みた。

### 新しい授業スタイルへの取り組み

「都市と法（担当：松橋圭子）」の授業は、教員と学生の双方向評価に加えて、プレゼンテーション時にはコメント票による学生同士の評価も取り入れる3方向型評価である。その結果は中間の個別面談でフィードバックしているほか、授業後半期にはディベートの司会・進行も学生に任せるといった思い切った授業形態である（写真1）。



写真1 学生主体にこだわった授業スタイル

当初、受身の講義に慣れ切った学生たちが、自主的に授業を進めていくことが可能であるか不安はあったが、半期の授業を終えた今ではある程度学生に任せることで明らかに変化がみられたのを実感している。

まず、特に課題を出さなくても、授業に参加するための事前学習にはかなり熱心に取り組む様子がうかがえ、授業では身を乗り出して発言をする姿が目立ってきた。その光景はまさに仲間との学びを「楽しんでいる」といっても過言ではない。また、グループごとの話し合いの時間では、頭だけでなく、席を立ち、アクティブに動きまわる授業スタイルが当たり前となった（写真2）。



写真2 頭も身体も動かす授業

正直、試行錯誤で展開してきた授業であったが、今回、学生の変化を目の当たりにしたことで、教員は学生の気づきや変化を促すための援助役に徹することの効果と手ごたえを感じた。

また、2013年1月28日3限の公開授業にて、履修者全員が、まんべんなく参加している授業の様子を公開した。

### 学部および学内全体への

#### 位置づけが今後の鍵

今後、更に課題プロジェクト科目を充実させていくためには、多面的な視点での検討、特に教員の意識の改革が必要不可欠となる。

プロジェクト科目を担当する経済学部の教員においては、学生と向き合うことに重点をおきながら、これまでも一丸となって授業発展のための検討・改善を重ねてきた。授業支援システムの活用や学生主体型授業の意義とその効果について、まずは学部内での更なる浸透と位置づけが直近の課題といえるが、学部を超えて、本学全体の教育においても広がっていくことを期待する。

## 理工学部活動報告

理工学部 眞田一志

### 2年目に入った理工学部

平成24年度で理工学部は設置2年目に入りました。昨年度は、設置1年目ということから、FD委員会の設置に始まり、さまざまな制度や活動を立ち上げた。平成23年4月に入学した第1期生が2年次に進み、専門分野の授業が本格的に開始されている。

### 学生広報スタッフ

理工学部に関連した広報活動に学生として参加・協力を依頼することを目的として、学生広報スタッフを委嘱する制度を設けた。例えば、学内で発行するパンフレット、Web「学生の声」への寄稿、国内外での入試説明会や、雑誌への寄稿、取材協力などへの協力を依頼する。

例えば、「現役学生の声」として、理工学部のホームページに学生広報スタッフから寄せられた原稿が掲載されている。



### 理工学部「現役学生の声」

<http://www.es.ynu.ac.jp/report/>

### 理工学部研究室紹介ホームページ

理工学部のホームページでは、オープンキャンパスのころからアクセスが増加する。理工学部の広報媒体として、ホームページはますます重要性を

増している。理工学部の広報の一環として、理工学部の研究室紹介ホームページを立ち上げた。各学科、各教育プログラムの教員が行っている研究の紹介や、実際に担当している科目等が掲載されている。高校生だけでなく、広く一般の方にもぜひ見ていただきたいと願っている。



### 理工学部研究室紹介の例

(<http://www.es.ynu.ac.jp/academic/dep/index.html>)

### 学部長による授業参観

公開授業とは別に、理工学部長による授業参観を行った。特に、理工学部となって新たに設けられた教育プログラムの授業を参観し、担当教員と意見交換を行った。参観した授業の例を下記に挙げる。

- ・情報工学 EP「計算機アーキテクチャ」
- ・地球生態学 EP「生物学実習」

100名単位の大教室で授業が行われる科目から、30名ほどの少人数クラスで授業が行われている。今後、年次進行に従って、学生の勉学の成果を温かい目で見守ることが大切である。

## FDの視点から大学における研究者の仕事を考える

環境情報研究院 松本真哉

## はじめに

7~8年前に前所属の教育人間科学部でFD委員となり、その時に、米国の大学教員の講演会や合宿研修を通してFDとは何かを体験したように思うが、最近はずっかりその定義を忘れていた。ニュースレターに何か投稿を、ということでこの原稿を書いているが、FDの定義もあやふやで、また大学院の活動とFDの接点はどうか考えるかなど仕事の合間に断続的に考え続けた結果、このような内容で雑文を書くことにした。ここで敢えて書く必要は無いかも知れないが、FD(ファカルティディベロップメント)を広辞苑で調べると「大学教員の能力・技能などの向上を目的とする組織的な取り組みや活動」と書かれている。この観点から、大学で曲がりなりにも研究者として仕事をしている自らの立場について最近ずっと考えていることを述べたい。なお筆者はいわゆる理系の仕事をしているため、多くの事例は理系の内容である。しかし教育や経済、経営の分野の方も、事例や単語などを置き換えてお読み頂ければ決して分らない内容ではないと思う。ただかなりの駄文のため、お忙しい方はどうかここでご自分の仕事に戻って下さい。

## 研究者としての歩み

一般的に「研究」と称される活動を体験したのは、学部4年から修士2年までの期間に所属した研究室である。色素の合成と構造解析を中心にその当時は「研究」をしていると思っていたが、今では子供のままごとに近い行為だったように思う。その時の指導教員はかなり放置に近い指導方針だったせいか、研究室の先輩後輩の関係は密接で、実験指導や勉強などが学生間で脈脈と引き継

がれていた。なお、放置スタイルが悪いと言いたい訳ではなく、私の性格には適合していた。今でも生徒の気質に適した指導の仕方が重要だと考えることは多い。

そしてその3年間の研究室生活の後、当時は液晶で一世を風靡していたシャープに採用され、液晶製造工場の生産技術者として勤務することになった。現場に配属されようやく仕事らしい仕事をするところよく聞かされたフレーズは、「大学では「研究」をしていたと思うが、会社の仕事は大学の「研究」とは違うので云々」というようなものであった。その当時はあまり何も感じずに、「まああそらそうやろ」と聞き流していた。製造現場で働き始めて2年ほど経つと、現場で発生するいろいろな不良や不具合の原因を「研究」して調べれば良品率の向上や技術開発の何か大きなステップを登れるように思うことが増えた。そこでその時の部長に、難しいかなと思いつつちゃんと調べてみたいと相談したところ、「真ちゃん、うちの会社ではそんな仕事は無理やで。ほんまにそういうことを調べたいのやったら、大学に戻ってやったほうがええで(ほぼ原文)」と、管理職として極めて懐の深い言葉を頂いた。そこで次の年に進学先を当時お世話になっていた先生に相談し、3年の企業勤務を終え、博士課程で学生のころに体験した色素の結晶の勉強をすることになった。

私にとって「研究」と名の付く活動に対する最初の意識改革は、この博士課程を通じて学んだものである。「研究」の活動としての意味することをまとめると、よく考慮された実験などで得られたデータの意味を十分に理解・解釈し、一つの課題をまとめて閉じることであろう。博士課程では、十分にこの訓練をしてもらった。学位をとる頃に

は、漠然とこういう仕事をしたい、というイメージは持っていたが、その時に大学に職を得たいという強い動機はなかった。現在も取組んでいる、色素の結晶構造や固体物性の基礎的な部分を調べ、新しい分子なり製品を開発する仕事をしたいと考えていたので、最初は欧州などの化学メーカーへの就職を考えていた。この時に再び博士進学時にお世話になった先生に相談した(こう振り返ると先生という存在は大きいものだ改めて感じる。この先生には就職の際もお世話になった)。希望する課題と就職の考えを話すと、既にその頃、国外の化学メーカーは大規模な事業再編の渦中にあり、もはや基礎的な研究を落ち着いてできる環境はないだろう、もし本当にそのような仕事をしたいなら大学か研究所で探す方が良く、と指導して頂いた。ここでようやく、大学や研究所などの「研究」ができる職場へ目を本格的に向けることになる。その後、理化学研究所でポスドクをした後に、運良く本学の教育人間科学部に採用され、残念ながら2年前の改組で消滅した地球環境課程を担当することになった。同時に、裸一貫に近い環境で研究活動を開始することになった。34歳の時である。

幸運にも、赴任してすぐに若手研究者にとっては大きな予算を頂くことができ、無我夢中で仕事をした。書類を書き、装置を導入し、結晶を育成し、最初に研究室に来てくれた学生達を教育しつつ一緒に実験を進めた。今もそうだが、成果と業績の二つの言葉が強く脳裏から離れない期間が続いた。研究室に来てくれた学生はみな優秀で、研究成果が少しずつ出てくるようになった。勤務して5年ほど経ったころに、このようなごく一般的な研究者としての生き方や考え方に変化が始まった。この当時、地球環境課程の教育業務で、何か妙な違和感を感じるようになっていた。端的に言うと、環境に興味を持っているらしき学生の、学びや将来像のイメージの狭さが気になってき

たのである。そして意を決して、高校生向けの産業課題に焦点を当てた環境教育教材の開発と実践の課題を開始した[1]。当初も今でも大きな葛藤はある。「空気」や「温度」を知っている学びや活動の領域とは全く異なる領域で新たに何かを考え生み出すことは、精神的にも肉体的にも負担である。しかし、馬力のある優秀な学生達に恵まれたことにも大いに助けられ、活動は軌道に乗って現在に至っている。最初に取り組んでくれた学生の研究室配属前に、“お前、腹くくって(課題を)やるんやったら研究室に入ってもええ、それやったら俺も死ぬ気でやる”、と今から思うとアカハラまがいの発言をしたことを今でも忘れない。彼の参加がこの課題の大きな後押しになった。そしてこの課題に取り組み出してからである、“「研究」って何や?”、と考え始めたのは。“誰のために?”、“何の意味がある?”など、問い掛けの言葉は尽きない。教材の開発中に、プラスチックや電池など、色素の研究活動とは決して直結しないことを再度勉強し、しかも単なる化学や技術の紹介ではなく、受講者の環境への興味や他の教科の学びとの関係、将来への道筋なども含めていろいろ考えたことが、図らずも自らの研究者としての考え方や生き方に影響するようになった。

例えば、効率が1%から3%に上がった、こういうことが新たに分かった、将来的にこのようなメリットが期待できる、など、よく学会や論文などで見られるフレーズがある。その筋の人なら意味や価値を理解できるだろうが、結果的に科学や技術を享受する社会への説明はそれで果たされているのか、ということがすごく気になり出した。同じことは、だからこの商品を買ってください、だからこの技術に基づく何かを選んでください、と企業が宣伝し、社会もなるほどそれは重要だ、皆で買いましょう、採用しましょう、となるのか、という図式にも言える。これが私の「研究」活動の二番目の大きな意識改革の契機であった。

## FDと研究

ここからは個人的な意見であり、自省と後悔の念を込めて書く。研究活動は社会活動の一つであり、決して、大学だからできる、企業ではできない、などの表現で語られるべきものではない。その活動の社会的意義を常に自身や社会に問い掛けながら探求する姿勢が必要である。研究室や研究分野、学会の中、ましてや研究者自らの中に閉じている性質のものではない。そして、難しいから小中高生や市民では分からない、という類のものでもない。分からないのは、伝えられない研究者本人の責任である。社会に説明する責任を果たせていないだけである。資金や場所も個人の立場で「研究」に取り組んでいる場合は、そこまでは問われる必要は無いと思うが、教育機関などの公的機関で行われている「研究」活動は問われてしかるべきであろう。このようなことを、教材を作り高校や中学などで授業を続けるうちに強く感じるようになった。

さあ、そしてようやくFDである。この私の二番目の意識改革の内容は、FDに求められる事項と直結しているはずである。大学教員には、授業や実験、研究などの大学における学びと活動の社会的な意味を学生に伝える責任がある。この社会的な意味というのは便利な表現であるがよく考えると難しい。しかし、各教育組織の個々の講義や実験及び全体のカリキュラムは、本学の社会的位置付けに基づき、卒業後の学生の姿を想定した内容になっているはずである。決してある分野に特化した特殊で役に立たないものなどない。「研究」には自然を含めた社会との接点が必要であり、学生は学びを通してその接点を幾つも感じながら次の道を考え巣立つのではないだろうか。自らの学生生活を振り返ると、おそらく当時はまだ牧歌的だったのだろう、決して社会における「研究」の本当の姿が教えられることは無く、ある意味「研究」の都合の良い一面のみ体験しただけだっ

たように思う(ただし筆者の場合は、麻雀などに明け暮れた生活を4年間送っていたので、普通のまともな学生は気付いていたかも知れない)。決して悪いことばかりではなかったと思うが、会社に入ってから自らの思考の根幹に関わる学びや気付きの浅薄さを恥じた。その想いを胸に、今、研究者として大学教育に携わっている。学ぶことや体験すること、「研究」することは、全て大切な行為である。しかしその行為の意味を、正しいかどうかの判別は大変困難だとしても、教員自らの考えや経験を基に伝えることができないと、多くの学生にとって大切だと思われる事を伝えることは難しいのではないだろうか。そのために研究者であれば、自らの「研究」を起点にFD的な何かを考えることから始めれば良いのではないかと思う。ちなみに、筆者の本職である色素の仕事では、最近はいろいろと考えた結果、基礎的な課題にシフトしつつある。もちろん、社会的意義などを考え続けている結果である。

## おわりに

短い期間だったが以前勤めた会社も、ほんの数年前までは液晶テレビのメーカーとして大きな存在感があった。筆者の故郷である堺市に巨大な工場と造ったころから雲行きが怪しくなり、いまや土砂降りか暴風雨である。円高を含む世界経済の影響が大きかったかも知れないが、ここで述べたFDと研究の関係に近いものが要因の一つとして横たわっているように感じる。マーケティングと呼ばれることが多いが、潜在的なものも含めた企業と消費者の位相整合は重要であろう。FD的な考え方は、決して大学教員のための課題ではないように思う。

参考文献:[1] 松本真哉, 日本LCA学会誌, 5(3), 338-343 (2009).

## 第3回しゃべり場報告「抽選制度の改善策」

学生FDグループ／教育人間科学部1年 中里美咲

### イベント概要

平成24年12月17日(月)、本学の教員・職員・学生が教育人間科学部7号館の2階、210教室に集い、「しゃべり場」が開催された。

今回は「抽選制度の改善策」がテーマになった。教職員の中には馴染みのない言葉だと思われる方も多いただろう。抽選制度とは、一般教養の授業の初回に「受講人数調整」として抽選が行われることを指す。

### 抽選制度のここが嫌！③

- ほかの人は「ラクタンだから」と言って抽選通って、授業内容に興味を持った私はその授業に落ちる。
- 初回授業が担当教員欠席だと履修登録期間ギリギリになりかなり困る！！
- 抽選の有無に振り回される
- 結局単位のために興味のない授業をとることになった

アンケート結果をまとめたスライドの一部

学生にとっては「自分が受けたい授業を受けられなくなる」可能性がある制度であり、このしゃべり場の前に一般学生を対象に行った事前アンケートでも、「抽選に落ちると単位計算が面倒になる」や「第二外国語で抽選があると他の授業との兼ね合いに困る」などといった様々な意見が出されていた。

今回は、アンケートを元に作成された5つの改善案(①レポート・課題制、②休暇中の抽選、③ガイダンス再考案、④その他の案、⑤現状維持)の中から1つを選んでもらい、話し合うという形になった。

### 活動報告

今回は参加者の人数が前回ほどに多くはならなかったため、学生と教職員を混ぜた3つの少人数グループを作り、議論をしてもらうことにした。簡単な自己紹介でメンバーが打ち解け和気藹々とした雰囲気の中で、本題のしゃべり場に移る。

今回は付箋を上手く使い、自分で声に出して文章化できないような意見を単語として書き出し、それらの共通点を見つけたり自分の意見をより固めていったりしながら議論するという形をとった。



しゃべり場の様子①



しゃべり場の様子②

机の真ん中に意見の付箋が貼られていき、そこから「現在の抽選制度の問題点」、「問題点に対する解決策」、「解決策のデメリット」、「デメリットへの対策」など順序立てて話し合いをしていく。

最終的に一枚の企画報告書を作成し発表を行うことを明確にしたため、流れをグループのメンバー内で理解しながら議論を交わすことができた。



グループ別発表の様子

発表はグループで作成した企画書を元にして、「提案」という形で進められた。A班は「シラバスの充実」「参加型の授業にして意欲ある学生を選抜」「教員の数を増やす」、B班は「定員を満たしてない授業を知らせるシステム構築」、C班は「初回授業を30分×3回の授業ガイダンスへ変更」など、様々な提案がなされた。

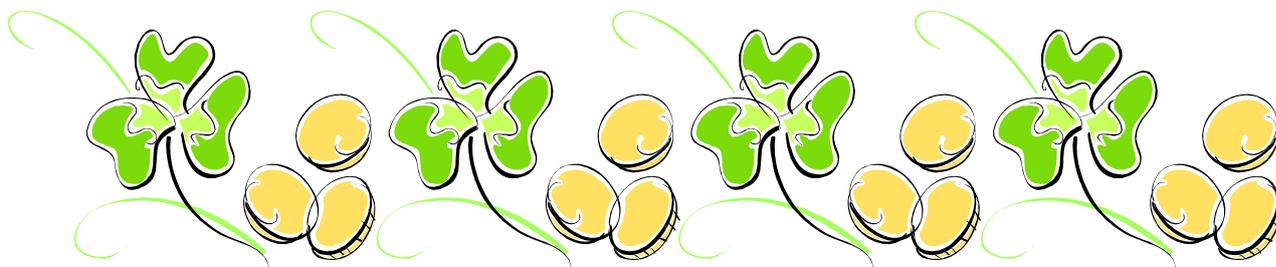
グループ発表の後の質疑応答でも、「なぜ空きコマがあるのはいけないことなのか」や「ガイダンスを30分ごとに区切ると単位として数えられなくなってしまうのでは」といった意見が出され、参加者全員が真剣に話し合う姿勢が最後まで見受けられた。

## まとめ

今回のテーマは学生目線から「変えてほしい」と思っているテーマであったためだろうか、履修登録の方法に関しては知らない、といった教職員が多かった事に驚いた。学生と教職員の考える「大学教育改善」のギャップが明白になったと感じられた。

「抽選制度」は既にあるシステムのため、変更したり改善したりすることは容易な事ではない。しかし、今回のしゃべり場で「授業そのもの」ではなく「授業を受けるための制度」に視点が当てられたことで、大学教育改善の意味や可能性が広がったのではないかと考えられる。

今後は学生と教職員との距離を更に縮めていき、「今必要な大学教育改善とは何か」を共に探っていく事が求められるのではないだろうか。



# TA 研修会

- その対応は正しいですか? -

TA（ティーチング・アシスタント）も大学の教育を担っています。受講生が**主体的に学ぶ**ためのアドバイスを TA ができなければなりません。よりよい教育を実現するために、TA 向けの研修会を開催します。新規採用の TA が対象ですが、継続採用の TA や教職員も参加できます。

◆開催時期と場所（予定）:

実験・演習担当（理系）

平成 25 年 4 月 10 日

理工学部事務棟会議室

講義・ゼミ担当（文系）

平成 25 年 6 月上旬

教育人間科学部事務棟会議室

詳細はポスター等で連絡いたします。多くの TA が参加するように声を掛けて下さい。よろしく願い申し上げます。

主催：大学教育総合センターFD推進部

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

## YNU FDニュースレター No. 23

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：[kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp](mailto:kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp)

発行／平成 25 年 3 月